今日を生きるのに精いっぱいな私たちへ
夢みてぇな話、語っぺし。

「たまにゃ夢みてぇな話（はなす）すねぇすか？」ある唐桑の新聞屋は集金をしながら住民にそう語る。もし、宿浦がかさ上げされて…もし、舞根が高台移転して…そしたらまた皆でここに住めるねぇ。

今は「もし」かもしれない。「万が一」かもしれない。でも、イマ唐桑に必要なのは、もしもの夢物語だ。どんな偉業も、奇跡も、復興も、夢物語から始まる。それを信じるかどうかは置いておいて、ついでに自分ががんばるかどうかも置いておいて、とりあえず夢を描きたい。バカでいい。復興を考える際に、すぐさまカネや世間体に頭がいくのはオトナの悪い癖だ。

「今日を生きるのに精いっぱい」は疲労漂うセリフだけど、「精いっぱい今日を生きる」は明日へつながる。もしもの夢物語は、そんな気持ちの逆転を起こすかもしれない。

いつか私たちの子どもが大人になって誇らしげに微笑み言う。
「ふるさとは唐桑です。親たちがゼロから立ち上げた町です」
そんな夢がある。

やっぱり唐桑で暮らしたい私たちへ
KECKARA けっから。はじめました。

復興について熱く語る人を集めました。将来を担う子どもたちに聞きました。
「復興への期待」を少しでも膨らませる「KECKARA けっから。」はじめました。

KECKARA けっから。編集部